HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	一切経音義全文データベース構築による平安時代古辞書についての実証的研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	李, 乃琦
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12958号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70224
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Naiqi_Li_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　李　乃琦

主査　教　授　池　田　証　壽
審査委員　副査　教　授　佐　藤　知　己
副査　准教授　林　寺　正　俊

学位論文題名
一切経音義全文データベース構築による平安時代古辞書についての実証的研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

唐・玄応撰『一切経音義』全二十五巻は、四百五十部以上の仏典について、出現する難字難語を抜き出して、漢字の字体・字音・字義および梵語の解説を施した音義書であり、七世紀中葉に成立した。『一切経音義』は大蔵経に収録され、数多くの版本・写本が存する。版本は高麗大蔵経（1251 年成立、慶尚北道伽耶山海印寺現蔵）に収録される本（以下、高麗本）が古態を伝えるとされ、南宋磧砂延聖禅院で雕印の大蔵経収録本（磧砂本）などの宋版が存する。日本には奈良時代以降伝来した古写本が存しており、法隆寺一切経大治三年（1128）写本が 1932 年に山田孝雄の編集により複製刊行されている。これは大治本と呼ばれ、全二十五巻中十九巻が存する。この複製刊行では欠損する巻を正倉院聖語蔵本と高麗本とによって補っている。1981 年、大治本は新出の石山寺旧蔵本（広島大学本の巻第二・三・四・五、天理図書館本の巻第九）とあわせて再複製された。

『一切経音義』に収録される大量の字音注記は中国語音韻史から、逸書を含む多数の漢籍の引用は訓詁学から、異体字や俗字の注記は文字学からそれぞれ注目され、多くの研究があるが、それらは高麗本を底本としたものであった。『一切経音義』の諸本系統を本格的に論じた上田正「一切経音義諸本論考」（1981）は、高麗本と日本古写本・敦煌本とには系統の相違があることを指摘した。日本古辞書との関係については、図書寮本『類聚名義抄』を中心に国語学者による検討が進んだが、依拠した『一切経音義』の系統に関しては、十分な検討がなされていなかった。

このような研究状況を一変させたのは、2006 年に刊行された『日本古写経善本叢刊第一輯　玄応撰一切経音義二十五巻』（国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会）である。これには新出の金剛寺本、七寺本、東京大学史料編纂所本、西方寺本、京都大学本を収録する。この複製は約千四百ページの大冊で、大治本の複製約七百ページをあわせると、日本古写本は二千ページを超える。『一切経音義』古写本の系統分類を行う資料は揃ったものの、分量の膨大さに圧倒され、系統分類に着手する研究者は現れなかった。

本研究の成果として、第一に特筆すべきは、このような膨大な分量の『一切経音義』日本古写本の本文をデータベース化したことである。高麗本を底本とする電子テキストを参照可能であったとはいえ、複製本で二千ページを超え、判読に困難を伴う古写本を逐一対照し校勘作業を完成させたことは、極めて高く評価できる。

成果の第二としては、『一切経音義』日本古写本を高麗本・大治本・石山寺本の三系統に分けたこと、七寺本は高麗本系統と大治本系統との取り合わせ本であることを明らかにしたことである。この結論は全文データベース構築によって導き出したもので、強い説得力を持つ。

成果の第三としては、『類聚名義抄』と『新撰字鏡』について、依拠した『一切経音義』の系統を明らかにした点である。『類聚名義抄』は全例を検討しており結論はまず動かないであろう。『新撰字鏡』は独自項目と独自注文に着目して出した結論であり、今後の検証の必要は残るが、結論の方向に誤りはないと判断される。

成果の第四としては、『一切経音義』敦煌・吐魯蕃断片群の特色を『一切経音義』の系統分類を踏まえて分析したことである。日本古写本を踏まえた分析を行った点は本研究の大きな特色である。

本研究の成果は、第３章と第４章の内容を訓点語学会で発表し、第２章の内容を漢文仏典語言学国際学術研討会で発表しており、その一部はすでに査読付き論文として公刊されている。第５章のうち敦煌本 P.2901 の研究は、書誌学分野で評価の高い雑誌『汲古』に掲載されている。

・学位授与に関する委員会の所見

日本古写本を中心とした『一切経音義』全文データベースの構築は、空前の成果であり、それを基礎とした立論には強い説得力がある。しかしながら、審査の過程を通して指摘された問題点も少なくない。『一切経音義』は辞書の一種であるが、辞書には過去の文献（『説文解字』等）を引用・転載して、その時代の文字言語の規範の根拠とする側面がある。本論文では、日本古辞書での『一切経音義』の受容方法、敦煌・吐魯蕃断片群の『一切経音義』での改編の方法を通して、その時代の要請を汲み取ろうとしているが、先行研究との相違も含めて、論じきれていない部分がある。論文の日本語表現は一定水準以上であるが、更なる洗練を期待したい。とは言え、論述の明晰さは際立っており、上述の問題点は、今後の研究の進展によって十分に解消することが可能であり、本論文の意義を損なうものではない。

以上の審査結果から、本審査委員会は、全員一致で本学位申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると判断した。